㊧3班に分かれて演習　㊨ロープ結索を練習する参加者　㊦協力して手際よく土のうを作成

風水害に備えて訓練

松前町消防団・自主防災会合同水防工法訓練

松前町消防団と自主防災会合同の水防工法訓練は5月13日、徳丸の重信川左岸堤防で行われました。

訓練には消防団、自主防災会や松前消防署など約450人が参加。台風シーズンに備え、風水害による被害を最小限に食い止められるよう、ロープ結索を学んだり、土のうを作ったり、積み重ねた土のうをブルーシートで覆ったりして、浸水を防ぐ工法を実演。参加者は、それぞれの持ち場で作業に汗を流しながら技術の習得だけでなく、消防団と自主防災会で連携を深めました。

訓練後、松原署長は「日ごろから、地域で活躍できるように、訓練で学んだ知識や技術はもちろん、指揮命令や指導力も向上させてほしい」と総括しました。

初めて参加したという筒井自主防災隊の向井健造さんは「勉強になった。ここではできるようになったが、実際に必要なときに冷静に対応できるか不安。帰って確認したい」と話していました。

区長が和歌山県広川町で研修

平成24年度統括広報委員視察研修

各地区の区長で構成する統括広報委員会は4月13、14日の両日、津波防災をテーマに、和歌山県広川町の「稲むらの火の館（津波防災教育センター）」で研修を行いました。

津波防災教育センターでは、3D画像の迫力ある津波の映像と地震発生や地鳴りのときに客席が振動する装置があり、地震や津波の恐ろしさや、何をすぐにしなければいけないかを学びました。

広村堤防では、語り部から昭和の南海地震の時の状況や、地震が起きれば津波が来る、「まずは逃げる」の訓練を繰り返し行うことが大切であることを学びました。

リポート

灘野　保さん
松前町区長会会長
宗意原

東日本大震災以後、津波に対する関心が高まっている中、広川町を訪ねました。

広川町の広村は、150年前の安政大地震のとき、津波で多大な被害を受けました。津波から逃れるため村人たちが途方にくれていたときに、千葉県銚子市から帰郷していた濱口梧陵は、高台で稲むら（ススキと稲束を重ねたもの）に火を放ち、火を目印に村人を安全な場所に避難させたそうです。

この津波で村の変わり果てた光景を目にした梧陵は、故郷の復興のために身を粉にして働き、被災者用の仮住居の建設、農機具、漁業道具の配給をはじめ、各方面で復旧作業にあたりました。津波から村を守るべく長さ600メートル、高さ5メートルの堤防の築造にも取り組み、そのおかげで昭和21年の南海大震災でも堤防を越えることはなかったそうです。私たちもその堤防を訪れ、150年も前に村人の手で完成させたことに感動しました。

しかし、いかなる堤防が築かれても、津波から完全に身を守ることは難しいものです。広村では「先ず何より高台に逃げることが重要である」と、津波の恐ろしさが先人からの教えで代々受け継がれています。

私たちも、日ごろから防災に関心を持ち、地域住民の協力を得ながら防災訓練などを行い、身の安全を守るべく心掛けたいと思います。

㊧祭壇に献花　㊨大盛況の「ふるさと市」　㊦義農太鼓を披露する松前小の児童たち

作兵衛翁の遺徳をしのんで

平成24年度義農祭

享保の飢饉（ききん）の際、後世に麦種を残すため、自らの命を犠牲にした義農作兵衛の遺徳をしのぶ義農祭は4月23日、義農公園で開かれました。

式典では、白石勝也町長が「東日本大震災を教訓に、自分のことより人のため、社会のためという崇高で人を思いやる義農精神が真に必要とされている。今後は町民総参加で、安全・安心なまちづくりができる体制を構築していきたい」と述べた後、参列者が献花を行いました。

式典後、特設ステージでは、餅まきや舞踊のほか、松前小の児童による義農太鼓、伊予万歳などが披露され、訪れた人を楽しませていました。

また、町内をはじめ伊予市や砥部町で生産された野菜や海産物などを即売する「ふるさと市」が実施され、大勢の人でにぎわいました。

差別のない社会を目指して

2012明るい人権の町づくり大会

明るい人権の町づくり大会は5月12日、松前総合文化センターで行われ、約600人が参加しました。

人権啓発劇では、岡田小6年生がインターネットによる人権侵害について理解を深めていく様子を描いた「言葉で伝えよう私の気持ち」を熱演しました。フィナーレでは児童全員が客席に飛び出し、ダンスをしながら観客とハイタッチ。相手の表情を見ながら言葉を発して相手の気持ちを理解したり、自分の思いを伝えたりすることの大切さを伝えました。

記念講演では、さまざまなチャレンジが話題の全盲の立木早絵さんがトークとピアノ弾き語りを披露。24時間テレビでキリマンジャロに登頂したときのエピソードなどに触れ、「何に対してもまず『楽しそうだな』と思います。例え苦しくても、全て自分を成長させてくれる『こやし』だと思うから」とチャレンジの裏に秘めた思いを打ち明けました。

そして「人権って難しく考えなくていいと思います。周りの人を思いやり、優しくすることだと思います。誰でも苦手があります。それをみんなで助け合える社会になれば」と語り掛けました。最後はピアノの弾き語りで、オリジナル曲「自分を愛して」など計4曲を披露し、会場を感動で包みました。

㊤熱演する児童たち　㊥フィナーレはステージと客席でダンスを披露　㊨客席で踊った児童は、観客とハイタッチを交わして触れ合った　㊧講師を務めた立木早絵さん。たゆまず、自然体でチャレンジし続ける早絵さんの姿勢が共感を生んだ